

昭和二十四年六月十五日發行（毎月一回十五日發行）

慈光

第一卷 第三號

目次

- | | | | |
|---------------|------------------------|----------------------------------|---------------------------|
| 四、あとがき……………12 | 三、所感いろく
増山銀治……………10 | 二、悪魔は蓮糸の腔にかくれ
る
山下成一……………9 | 一、私の入信の徑路
故・池山榮吉……………1 |
|---------------|------------------------|----------------------------------|---------------------------|

昭和二十四年
六月號

私の入信の徑路

故・池山榮吉先生

私自身の信仰の徑路はどうか、自分のことであるから一點のすきもなく、もれなく、くわしく、明瞭的確に語れそうなものですが、實際なかくそ、多くものではありません。それはそのはず、もと私達の思うことす、ことには、私達自身に知られていない無数の因子がはたらいているからです。まして信仰などという極めて奥深い、神秘的なたましいの過程に至つては、到底自分の意識した材料だけで十分の解説の出来、筈のものではないのです。とりわけ私どもの信仰、即ち、絶対他力の信仰は、私達が信じようと思つて信ずる。言い換れば、私達に信ずる意志の鞏固性があつて、その力で信ずるのではない。他力の方から信ぜしめられるのでありますから、どうしてもそこに割りきれない、私達には、はかりしられない因子が加わります。ですから、猶更むつかしいわけでありませう。

が實際——私が現に思つていよう——私の四十二の時に信仰に入つたものとして、そこに至るまでの経過を觀察して見ますと、要するに矢張り、自己を見下げ果てたとき、絶対に信頼した人の手引で信仰に達した。やや具体的に言つてみると、自身の、罪惡深重、煩惱熾盛に驚かれて、どうすることも出来なかつたとき、親鸞聖人のお言葉にしたがつて、念佛が申されるようになったのでありませう。

す。これから少しそのいきさつを申上げて見ようと思ひますが、ただ今申しました通り、とても完全に言い表わせるものではないので、そのおつもりで、おききと願ひます。

母の感化

何はともあれ、私が眞宗の家庭に生まれたという事がすでに、私の意志のほからいを超越した、後年私をして名實共に眞宗の信徒とならせる一大因子であつたに違ひない。こう言つると眞宗以外の家庭に生まれた人は眞宗に入り難いというように聞えるが、それは必ずしもそうではない。眞宗でいながら、眞實の信仰のない人、否、眞宗というのは名ばかりで、無宗といつた方が寧ろ事實に適する人が極めて多いように、本來他宗、若しくは無宗であつたのが眞宗に入り眞實の信仰を得る人が甚だ尠くない。劫つてその方が徹底し易い可能さもある位である。が眞宗以外のいわれを聞く機會さえ得ずに終るのが大多数であるのに、その機會に接する可能の多いのは、眞宗に生れた人に恵まれた強味であります。

私の父も母も、代々眞宗の家に生まれた人でしたが、特に母には、何かにつけて篤信の傾向が著しくございまして、その影響が自然私の宗教性を動かさず刺戟した事は疑えないのであります。時母から宗教の話をかきかされたこともあり、説教の坐に伴われたこ

ともありましたが、とりわけ私を最も強く眞宗にひきつけ、眞宗から離れにくくしたのは、母が重い病にかかつて、助からないかもしれないうことは一度ならずあつたのですが——當時まだ小學生だつた私にいいきかせた言葉でした。「私は今度は死ぬかもしれない、死ぬはお淨土へ参らしていただく。草葉のかげで待つてゐるから、お前も御信心をいただいて後からおいで！　そうでないといふ親子は一世といふから、この世かぎりでもうあることは出来ない。だから是非信心をいただかなくてはいいけない。でも、もしそういふかなかつたら、いいや！　私が御淨土から迎いにきてあげるから」と、かう言つた母の言葉は、私の心に沁み込んで、大きくなつた後まで忘れる事ができませんでした。大分信仰の道から遠のいてゐるな、と氣づくやいなや、すぐ思い出すこの言葉にひかされて、立ちもどらずにはいられませんでした。

眞宗 眞 眞

こうしたことが因となつたのでしよう。長じて高等の教育を受けつゝあつた頃、積極的に信仰そのものは興えられて、いまでも眞宗に對する眞の念はなかく／＼さかんなものでした。私の若かつたころは、まだ宗教に無關心なばかりでなく、一種の反佛敎的の氣風が知識階級の一部にただよつてゐた時代です。ですから私の先生の中にもさうした系統の人があつて、折にふれて、やたらに佛敎をけなす話を聞かされた事があつたのでしたが、それにはどうも心服出来なないで、内心反感を抱かされたものでしたが、それが若し、友人でもあつたら、平生内氣な私も、豈分口角泡を飛ばして議論し合つたこともあつたのです。が、要するに外に對して、即ち、基督敎

光明の縁に

私をして信仰の門戸にくぐらせずにはおかない段取は、こうして着々として進歩して來たのであります。

十方世界を照耀する、無碍光遍照の明朗なるにてらされて、無明沈没の煩惑漸々にとらけて云々

とはこうした過程をいうのではないでしようか。しかし

涅槃の眞因たる信心の根芽わづかにきこすとき云々

というところまでとどくには、まだ幾春秋をおくらないではならなかつたのです。

人によると案外すらく／＼いわれるのに——現にさうした方も居られるのに——しぶがきのしぶとい私が、うろわりの煮え切らない状態から、思い切つて決定の信、横超の境へぬけるには、まだなかなかひまがかかつたのであります。

くすぐつたい感じ

岡山の信仰界の人々は、初めから私を篤信の人、決定的信仰の持ち主を以て遇しました。私の方ではこれに對して、一種くすぐつたい感じなしにはいられなかつたのです。ながねん信仰を求めて來たが、今ではどうやら手に入れた氣がする。人もそれをみとめてゐるのだ、と思ふとなんだかいい氣持になつたが、どうかすると、我ながらこれでいいのかしらと疑われ、のみならず時としては、持つた篤の信仰が、また失われたと思われることさえあると、なんだか心苦しくなつて、人の期待にそむかない信仰の確立に焦りました。この心苦しさと、いい氣持とが一緒になつて、あのくすぐつたい感じを醸したのだと思ひます。

出にくい念佛

に對して佛敎を、他家に對して眞宗を擁護し、より正しく言へば眞眞したというにとどまつて、内に——型としては心得ていたが——活きた信仰といつては、實は何もなかつたのであります。

信への憧憬

眞宗眞眞は、眞宗の信仰こそ、あらゆる眞眞という信仰のうちで、尊さに於て無比である。という價値判断を豫想する。すでにこの判断があるからいつまでも單に眞眞というだけで甘んじてゐる筈はない。二十をいくつかすぎた頃から、内省の傾向が益々深まり、習性となるにつれて、成る程、眞宗の教義は人生の實際にいかにも適切なものだといふ感じが、愈々強く、力強く根を張るようになりまして、いつとはなしに眞眞の念が一轉して憧憬の情と交つてきました。ところへもつてきて三十前後からの近角君との親交は、信仰的人格を現前せしめて、更にこの趨勢を促進する動力を加えたのであります。

清閑に恵まれて

私が六高の敎授として岡山に落着くまでには、當時私の理想とした社會事業の實現に關して、だん／＼失敗の歴史があつたのです。が、この経験は、私に自己の眞相を看取すべく、沈痛な内省の資料をあたえてくれました。岡山での生活は、私に取つては、東京、大阪でのそれに比して、何んの事はない市井を遊んで、山林に隠れたような、至つて清閑な、且つ清貧なものであつたが、それだけ多年の懸案たる信仰の憧憬を果遂すべく、靜慮の機會に富んでいました。考えて見ると、この清閑と、清貧といふことがありがたいです。兩者は私共のあれ狂う心の駒を、信仰の門戸に驅る鞭と相車とであります。

此の時代に、私が一人ひそかに手古摺つた問題が二つありました。一つは念佛が出ない、と言つていくらくらいに出にくいことでありました。これはどうも信仰の持ち主としてはいかにもおかしい、辻褄の合わないはなしと思はずにはいられませんでした。つとめて稱えようと思つたが、人前では氣まがりが悪くて、喉まで出かかつて來ても、そこで押えてしまふのが例でした。そうかと言つて、一人のときでもなかく／＼出ません。籠の奥に蹲つた小猫のように、無理に引張り出さない限り出ようとしません。餘程思い切らないと、たとえば嚴冬の朝、温かい寢床から起きて、冷水摩擦をするように、餘程奮發しないと出て來ない。苦しまぎれに突出した最後の一策が、日頃口癖になつてゐた唱歌に代えて、念佛を口癖にしようと思つたことで、うっかり唱歌が口に出て、ハツと氣付くや否や念佛に代える、というまことにおかしくもあり、いじらしくもある、飛んだ悲喜劇を演じつゝあつたのです。

佛陀の存在

今一つは信仰に隨伴して起るといふよりは、むしろ直接信仰そのものの有無、成否の問題で、如何にして佛陀——信仰の對象、救済の本体である佛陀の存在が信じられるかといふことであります。信仰の筋書、眞宗の敎理一般は、もうよく呑み込めてゐる、これ以上わかりようのない程にわかつてゐる。と思つてゐるに拘わらず肝腎の佛陀そのものが、或る時はある事に疑いなく、或る時は——そう考へたくはないのだけれど——ないとしが思われなかつたのです。月の世界へ旅した裁縫師が、お月さまの註文で、その上着を拵へることになつて、寸法を計つたところ、背中の方が僂僕のように丸く、腹の方が馬鹿に薄い。変な格好だとは思つたが仕立てあげて、

せて見ると案外よく似合った。ところが驚いたことには、一日一日とたつにつれて、だん／＼腹がせり出してゆく。仕方がないから上着の方を解いて、新しい布片を縫ぎ足して間に合わせて行つたがとうとうしまいは球のようにまん丸くなつた。やれ／＼これでまあやつと手が引けたわいとよるこんだのも束の間、今度は前と反対に背中の方がこけてきて、折角きちつと合つた眼がだんだんだぶだぶになつて来るので、また後の方を解いて餘計なだけ切取り、切取りしてゆくうちに、とう／＼背中が全滅して、薄ぺらな腹だけになつて了つた。するとやがてお月様が寝入りこんで見えなくなつたのを幸に、また同じことを繰り返させられては堪らないと、こつそり逃げて歸つたという話がありますが、佛様があるなら有る、無いなら無いとどつちか一方に決まれば手古摺るといふこともないわけですが、お月様が満ちたり虧けたりするのと同じように佛様が出たり引込んだり、明るくなつたり、暗くなつたり、まるきり見えなくなつたりするのだから、やりきれたものではなかつたのです。

附會の方程式

たとえば信者同志が打寄つて、大いに信仰を談じたとする。こうした場合には大抵大慈悲の佛陀を争うべからざる豫想とする。この豫想がある限り、そしてここから出發して人生の相を諸觀察する限り、どう話が向くにしても、どどのつまりは一種の有難さ、よろこばしきを感じしめずにはいない。その感じは信仰の結果、否、信仰そのものの發露だ。と思うと自分が現に信仰に生きつつあることが疑えない。その時にはうれしくもあり、満足でもあるが、さて一人になつて、不圖、とはいふものの一体大慈悲を以て我等に臨む佛陀とは、どこにどうみとめられるのかと自問すると、——た尤信ず

體といつたようなものと看做したり、又時としては人類の愛や歴史のうち認めようとしたり、手をかえ品をかえて、さまざまに試みてみるが、要するにこつちの工夫で作つたものは、こつちの心持、猫の眼のようにかわる心持一つでこわれてしまう。で佛の見える時は得意見えなくなると失望、それからまた見たいと焦る憤懣とが、走馬燈のように交々循環して、いつ果つべくとも見えない悲喜劇を演じつつ、ここにもまた常没常流轉の歎きが繰り返されるのでありました。

内省の促進

對佛態度がこう一つところをお百度をふんで、いたのと反對に内省だけは絶えず進んで止まなかつたのであります。或る時はこういう事もありました。それは或非常に責任感の強い人が、或るきつかけから、自分が從來不眞面目であつたのに氣付いて、それからというものには非常な煩悶に陥り、世間からは輕蔑または非難の眼で見られるように思ひこんで、くよくよとして引込勝ちの目暮しをしていたのですが、妙に私を信頼して、私だけには頻りに胸中の悶々を打明けけるのでした。處がそれを聞かされた私に見ると、その人の惱みのたねは私も負けず持ち合せていたので、何んの事はない、その人は私の面前に現われて、私自身を責めたてる、私の責任感の具体化、私自身の満身の創痕から流れ出る血に塗れた私自身の影としか思えなくなつて、恐しくもあり情なくもあり、こつちも同じ煩悶に引摺り込まれやしないかと、密かにおしげをふるつたことがあつたのです。

大いなる蔑視

こうした自分の眞相を深刻に見せつける機縁が、あちらからも

るのだというだけでは追加なくなる。何んとかしてその存在の理由を見付けたくなる。それにはいろいろの方法があるが、私が最も好んで用いた方法は、因果の法則を前提とする一種の方程式的推論でありました。善因善果、惡因惡果ということは——私は考えたのです——争えない。現在の状態はよかれあしかれ、過去の因から生じた果でなくてはならない、だから自分の現在には、過去の果であるに違いない。さて自分には果してどんな因があるかを考えて見ると、現在の自分が罪惡深重にして、善根薄少であるところから推して、過去の恐ろしくさうであつたらう。假に惡が八分、善が——精々多く見積つて——二分とする。即ち10と10が、自分の理在過去の縮高とする。ここに10の果を生じていい筈である。ところが私の當時の考えでは——當時私はどちらかというと樂天的で、現狀を厭うよりはむしろ享樂しつつあつたので——私の現狀を快不快の點から見て、どうしても10とは讀むとれない。劫つてすくなくとも十いくらかでなくてはならなかつた。この謎を解くにはただ一つの方法があるばかりである。私自身を支配する因果の法則の外に、私に加擔する何物かがあるに相撞しない。それが佛の恩潮であると考えたのである。

然しこれは自分の主觀的評價であるから、同じ人でも其時の其時の氣分によつて違います。得意の時が高く、失意の時は低く見積られます。而もそれが餘り低く見積られるとこの方程式は役に立たなくなりません。新天家にはよろしいが厭世家には全然駄目です。同じ人でも若い希望に満ちた時代には間に合つてゐるが、年をとつてだんだん冷靜になるにつれて不向になります。

着こんた風に佛陀を豫想したり、想定したり、その他或は宇宙の本

良心の聲

良心は容を改め、聲を勵して私を諷る。
「お前の心の動きをみつめてごらん!! おまえは一体今何を思い、何をしてゐるか。うわべは體のいい賢善精進でつつんでいるが、うちには醜い虚假不實が巣くつてゐるではないか。今にはじまつたことじやない。おまえの過去をかえりみてみるがよい。反省に疎い手間は俯仰天地に愧じずなど、よく平氣で口にするが、この言のおそろしさを承知してゐるお前に對つて、その言葉通りの態度を註文するのは無理かもしれないが、たとへば公に關する問題に對しては、縦し、公のみ私を忘る、とまでは行かずとも、せめて公を主とし私を従とするところまでは漕ぎつけたものだ。どうだね、それが適合えるかね。お前の目論だ社會事業の經營にしてもそうだ。おまえもまさかあのもろろみで、金錢上の利益を得ようとは思わなかつたらうが、あの種の事業の一番槍の功名はたしかに求めていたではないか。むしろこの功名心が第一の動機となつて、あのもろろみがかつたのだとは、今ではお前も知つてる通りだ。勿論このことはかりにや限らない。その前にも、その後にも、これと似たことは澤山

ある。お前の記憶の糸を手繰つてごらん、枚擧にいとまがない程、ぞろぞろと出て来るだろう!! 公に關することさえがそうだもの、純然たる私事に至つては猶更だ。お前は何時もお前の利益を中心として、それを通すに便利だとなると、表に何とか理窟をつけたり、或はつけることさえしないで、他を犠牲とすることを厭わなかつた。どうだいい思ひあたるか。これが思ひ當らなかつたら餘程どうかしているのだ。苟くも人と利害の交渉のある件で、お前のすることとなすことが、實際そうでないのは殆んどないと言つていい位だもの!! 何んたる自利一點張りの人間だろう。たまには眼目一番、思を潜めて考へて見るんだね。尤もそんなことをすると、とてもじつとして居られなくなつて、假想の平和は忽ち失われてしまうかもしれないが。

ところで話をまた前に戻して、きょうこの頃のおまえは一体何を考へ何を望んでいるのだ。おまえ自身にきいて見るがよい。おまえのうちに現に働きつつある動機——それが邪でないと思へるか。それが正しくないということはおまえ自ら百も承知じゃないか。だのに、お前は改めることが出来ない、昨今はもう出来ないのを見越してか、改めようともしないではないか、何たるずう／＼しい態度だ。みるに見かねて、私が口をきいたことも再三である。けれどもお前の私心は、實をいうと、この私、即ちお前の良心よりも遙かに強い。初めは神妙に聞かせるようにみせて、いざ尻尾を押えられる段になると——というのは、一旦改めますと誓つた言葉を裏切るような證據でもつきつけられると、忽ち態度を一変して、くどいとばかりそらうそぶいて、この老いぼれ奴、黙つていろ!! おとなしく聞いていりやあつてあがつて、等毒々しく啖呵をきり出す。余りの

全部を承認する外はないのです。私の立つている地盤が崩れ出して足のふみどころがなくなつたのです。生活の中心點が失われてしまつたのです。

目的のない生活

言うまでもなく此の時には信仰は崩れていました。今まで往生極樂を願う衆生としては信仰、人類社會の一員としては名譽を、一生の行路の目的として憧憬し、追求して来たが、一は高峰の花、一は水中の月、手には取れないものとなつてしまつたのです。『茫々たる恨みには渡りに船を失うがごとし、濛々たる愛には闇に道に迷うが如し』にわかにか盲目になつたと同じこと、どう生きて行つたのか、さつぱり見當がつかない。

目的のない生活! それはとても堪えられたものではありません。千古の淋しさの漂う空虚、もしその空しさが満たされるとなら、羅刹の口にも飛び込むでしょう。自由を奪われたのではない、自由はそのままにあり乍ら、その持つて行きどころのない無期の精神の牢獄です。いかに藻掻こうが、悶えようが、いかにのたうち廻ろうがどうすることも出来ないのです。

かなしきは、飽くなき利己の一念を
もて餘したる男にありけり

啄木

これが宿業の重荷を背負つてゐる男の運命です、繫縛の凡夫のおちこむ必然の陷阱です。罪惡を餌食とする大龍は、その底で口を開いて待ち構えているのです。

あゝ信仰がほしい

すでに名譽の方が駄目になると、私は浮世の望みを絶たなければならぬ。それは誠に名残りおしさの極みであるが仕方がない。社

仕打ちに腹が立つて、取押しようとしたつて、力づくではとても駄目私などは跳ね飛ばされてしまふ。

私の口から云い度くないが、實際おまえを左右するのは私ではななくて、おまえの私心だ。試みに目を後へ向けて御覽!! 要所々々に歴然と私心の跡が見出せるではないか、お前は眼を前に向けて遠くを見る間は、私の指圖に委そうと思つてゐるが、實行の一段になると、にわかにか私心のささやきにきいて、私を袖にして恥じないのだ。

良心はこう言つて長太息したが、やがて語りつづけたときは、その表に皮肉な微笑のかけが見えた。

『ときにおまえは名譽が大好きだつたね。おまえの抱いている人世の理想は名譽だ、と言つても過言ではない筈だね。成る程名譽もよからう。それに値する態度さえあれば!! だがどうだね。お前はこれを考へて見た事があるのかい。お前のさきに觀察した心の態度、昔から変わらない、変えようともしない、また変えようと思つても恐らく変わるまいところのおまえの心の態度と、お前の何よりも願うてやまぬ名譽と、兩者の間には何んの矛盾もないかね。そうした心の持ち主が、名譽に値するものであるか、それともお前の評價には名譽の代りに虚名の通用を許すという便法でもあるのかね』

失われたる中心點

骨を刺す良心の諷刺は私を驚倒せしめました。黒闇々の空洞に投げ込まれたのです。名譽、私に取つて何より大事な名譽、私の人生に於ける唯一究竟の的であり、ひまわりにおける日輪のように、私的一切を養向せしめる名譽。その名譽に價いする資格の絶對的否定、それが私の良心の批判なのです。それに對して私は一言もないのです。

會人としての生命はつきたも同然である。この生き甲斐のない世の中に、唯一つ残されたのは超人的希望、即ち信仰である。考へて見ればこんな破目に陥つて息塞る苦しさは喘ぐのも畢竟信仰がないせいだ。信仰さえあつたら!

ああ信仰が欲しいものだ! 私の望みはこの一點に集中した。私は息を凝らした。じつと思いを凝めた。光の一閃をも見のがすまいと心の眼を一杯に見張りながら、

彌陀觀音大勢至 大願の船に乗じてぞ
生死の海に浮かびつつ有情を呼ぶてのせ給う

呼び聲

この時だつたのです。どうしたことか私の念頭に不圖あの親鸞聖人の告白、

『親鸞におきてはただ念佛して、彌陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり』
という御文がうかんたのです。その刹那、半ば、あわただしく御文を引寄せように、半ばひしと御文に引付けられるように感じながら、私は——心身を擧つて——一途に御文の中に没入した。と思ふ間もなく、忽焉としてある衝動を感じました。

そうだ! 私も聖人と一緒に! とうなずいて、心に親鸞とあるのを私と、よき人とあるのを親鸞聖人と讀んだと思つた途端、一聲南無阿彌陀佛と稱えたのをきつかけに、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と、出水に堤が切れたかのよう、滔々として高らかに、とどめなく念佛が迸り出たのであります。

そうです念佛が出たのです! あの云いにくかつた念佛が出たのです。しかも續けざまに淀みなく、生まれて初めて念佛が、何んの懸

念もなくすらくと稱えられたのです。

この間、私は未曾有の莊嚴な靈感に擲まれて、今までのさびしさくるしさ、やるせなさ、一聲一聲の念佛に、拭つたようにかきけされるあとから、何んとも云えない心強い、頼もしい感じが、心の底から湧きあがるのを覺えつつ、ははあ、これが信仰というものであつたか、と初めて思い知つたのであります。

信の一念

『夫れ眞實の信樂を接するに、信樂に一念あり、一念とは、これ信樂開發の時尅の極促をあらわし、廣大難思の慶心を彰わす』私は今まで述べて来た私の体験で、この聖人の信卷末の冒頭の文を讀ましていただいたと信するのであります。それは私の四十二のときでありました。世間でいう男の最大の厄年に、前念に命終して、後念に即生する、大悲廻向の大神心を獲さしていただいたとは、一入ありがたさに堪えない次第であります。これと申すもひとえに親鸞聖人の御手引によりましたので、この歎異抄第二章は、私に取つては私の信仰を確立せしめた如來の金言であります。

『慶ばしい哉、心を引替の佛地は樹て、念を難思の法界に流す』これについて後日ゆつくりお話し申し度いと思ひますが、私はこの樹心佛地という趣きを、やはり第二章で、心的事實として味讀させて頂きました。

金剛の信

この時を以て、私の信仰は流轉の數を免かれぬ疑情の基礎をほなれて、金輪際ゆるぎのない佛地の地盤に建てられたのであります。爾來十餘の星霜を重ねて今日に至るまで、時に多少の滲淡はあつても、本質的には一貫して始終かわるところがありません。嘗て

悪魔は蓮系の腔にかくる

自分を省みれば、その眞相をハッキリ見わけうる様に思ふけれども、良心の光がくもりて残るくまなく之を見きわめる事は悲しいかな、覺束ない事でありませぬ。蓮の糸の中に悪魔がかくれているように、氣著かぬながら心のドロカの隅に定散自力のかがが残りて居て、自己の本來の相を見きはめる事も出来ず、又あく迄救わんと御辛勞下さる佛陀の御心も頂けず、多年熱心に聽聞を重ね眞宗の御教の筋合はひと通りわかり居ても、本當に救われたような心にもなれず、ドロカに不安の影をかくして居て、いつまでも落ちつかれない事は誠にいたまじきかぎりであります。私も往年求道の途上にて、永い間此の混迷から脱し得ないで苦勞を重ねたのであります。某日歎異抄第九章の祖師が唯圓坊の間にお答えになりし一節、『喜ぶべき事をよるこばぬにていよ／＼往生は一定と思ひ給ふべきなり』を通して、始めて私の愚悪の相がそれ程までに深かりし事を知らせて頂き、同時に久遠却來呼びづめて下されし彌陀の大慈悲に驚きを立て、元來凡愚の私が私自身其の相を發見し得るようになり思ひ揚がりつつ然もそれすら知らざりし程の暗昧人である事を學びかかる。淺間しき地獄行きの私を、あくまで先手かけて御救い下さる彌陀大悲の御本願を感戴し信順し奉るに到つたのであります。

持て餘した二問題はひとりでに解決を告げました。今佛も稱えられれば、佛の存否も問題に上がりませぬ。加之、その佛は、体験前には唯の佛陀であり、如來であつたのが、体験後には、その佛に固有名が冠せられて、阿彌陀佛でなくては納まらなかりました。阿彌陀佛のほかになんか佛がましましたも、それは私と何等の交渉がないとわかつたのです。『唯觀念佛衆生、攝取不捨故、名阿彌陀』念佛もうさんと思ひ立つ心のおこるとき攝取して捨てたまわらないのは彌陀一佛であります。そしてこう自然に念佛する心持は、如來よりたまわりたる信心として、已・今・當の信者を通して、一つでなくてはならないのです。願わくば親鸞聖人の仰せにきいて、聖人とおなじ信心をいただいて念佛成佛は眞宗と同じ道をたどりたいたいものであります。

池山榮吉先生遺詠

一人ゐてよるこぶこゑや明け易き
白道のかなたやいかに秋の風
白道のかなたにつづく紅葉かな
たまさかに如來に面す春の風
あふむけに仔犬ねころぶ日南かな
歳且にまづおとづれし念佛かな
こゝはまたどうしたことで暖かき

山下成一

元來法に親しみ聽聞を重ねている内にはハッキリ自己の罪惡もわかり彌陀の御眞實も頂けるように思つて居た事が、そも／＼驕慢の極みであつたのであります。聞法に自身を歸せば自ら光を出し得るようになり自惚れていたのであります。聞けばわかる力があるように思ひ揚がりつつ、熱心に求めてその眞面目な態度を自慢しつゝあつたのであります。何んといふ暗愚な事でしょう。又法喜を發見せんとする動機には、知らず／＼不純なものが交りて居たのです。法を喜んだお蔭で此世を安んじて送り未來は佛になれる仕合せを獲る爲に佛様の御力を利用し又使ひ盡さんとする功利心がかくれている事を知らず、熱求已まなかつた事までが實に佛陀に對しいかに非禮を行いつつ之を省みなかつた事でありませぬ。何んといふ冒瀆でありませぬか。佛陀は予め不請の友となつてあく迄廻向して下さる事をも知らず、聞恩の誠を佛陀に廻向してその御眞實を滿喫せんとしたのであります。法喜を求むる心の中にも斯くも邪見や驕慢や惡の影を多分に藏している迷妄の深い罪の深い奴が特に捨てられないあくまで救われねばと御辛勞下されし底ぬけの大慈悲に遇ひ奉りてはイヤハヤ言亡絶頂、唯々その御眞實を感戴し信順し奉る外ない事になつたのであります。喜べない事實を知らずして、聞けば喜び得るものと

思い揚がり又喜びに自惚れて高天な御恩をも忘れ勝ちの私をこそ
の一番に救われねばと矢つぎ早やに御眞實をあびせかけられて見れば
もう何も言ひ事がなくなつて、知らず念佛せしめらるるに到つたの
であります。喜べないからお救い下さるとは、何んとそのはかり知
られぬ大悲でしよう。私は此の入信の一句を常に繰返し／＼頂いて
悪性更にやめがたき心は蛇蝎の如き私の相を私の曇つた眼にもうつ
るようになつた事が佛陀の光明に照らされた事と思ひ、我ながらあ
きる身なるが『かかる淺間しき身も本願に會い奉りてこそ、げに



所感いろいろ

増山銀治

『われらが身の罪惡の深きほどをもしらず如來の御恩の高き事を
も知らずして』(歎異抄)
まつたくの『知らざる』が故に罪も御恩も感せず平氣で居られ
るのです。罪惡がわかつたとか氣づいたとか言ひたり感じたりして
も、罪惡が止まない限り氣づいたのでも解つたのでもありません。
終戦當時私は田舎へ歸つて來まして食糧に非常にこまりました。
その時川魚をとつて來て榮養として居つたのですが、其の魚を食べ
る時魚に向つて『全く申し譯ない。お前の命を取らにや生きて
行かれぬこの身ゆえどうぞかんにんしておくれ』とあやまるのが常
なでした。これが罪惡を知つた事だと思つていたのです。しかし

それはほんとうに罪惡を知つたのではなかつたのです。本當に罪惡
を知つたならば魚をとる事を全然やめてしまふのがほんとうに罪惡
を知つた事なのです。
如來の御恩もほんとうにわからさして頂けば朝から晩まで涙の流
しづめの筈のところ、口では有難い／＼と言ひながら涙一つこぼさ
ずに居るといふ事は本當に如來の御恩がわからぬ證據です。その知
らずして迷つて居るこの私を御見抜きなされて、それだからこそと
不便におぼしめし下さるお慈悲一つに安心させて頂くのです。

攝取不捨

春の頃より念佛の中へはいり込んでゴロリとねころんだ様な体感

がして持たのです。

今迄はお慈悲は實に有り難かつたのですが、こちらから力を入れ
て佛に近づいて居つたのです。と言ひますのは、阿彌陀様がもしお
捨てになられても私の方からは絶対に離れられぬと言ひ氣持ちでし
た。もつともその奥底には『阿彌陀様は絶対に御見捨てはなさらん』
と言ひ信念があつたのです。それで『私には念佛がある』と言つた
程度であつたのが今ではそれ位ではなく念佛中我有とでも言ひまし
ようか。『念佛の中に自分』と言ひものが見え出して來たのであり
ます。もう一つ、今迄はまかせきつて居つたのです。それが今では
そのまかせきつたまんまがまかせられて居る事に氣づかせられた
たのです。結局まる／＼と攝取されきつたとしても言わにや言ひあら
わしやうもない感じなのです。それと同時に『ああそらだ、攝取不
捨だナ』とキック感じたのです。今までは攝取と不捨を『オサメト
ツテ頂ク』だけの意で拜讀させて貰つて居りましたのです。『オサ
メトツテイタダク』だけでことがすむなら不捨がついてなくともよ
さそらなにチャンと不捨がついてあります。この不捨がまことに
たのしい極みなのです。私がよき人花田先生の御教化をうけて入
信させて頂きましてより六九年になります。その後も引き續き一
方ならぬ御教化をこらむつたお蔭で六九年経た今日始めて不捨の御
心に引きつけられるのも皆この不捨の『大働』のお蔭です。

攝取不捨を言いかえますと大慈大悲でございます。攝取の方は大
慈です。これは我が身の罪惡の深きほどを知らず、如來の御恩の高
き事をも知らずして迷える私を見るに忍ばれぬと思ひ召し下さるの
です。不捨の方は大悲です。その立つ頼のない不便な私をどうにかし
て救わにやおかれんと、どんなにならうと、こうならうとどこどこ

迄も見捨てはせんぞ、離れはせんぞとの切なるお心です。攝取だ
けで事がすむなら六年前と何らかわりはない筈です。だが今では不
捨がなければおさまりがつかないのであります。不捨のあるお蔭で
六年後の今日攝取して捨て給はずとおなかの中へくるりとはいり込
んでキョトンとしたのです。
攝取不捨とは逃げる者をつかまえて離さぬことだ位のなまぬるい
事とはちがいます。願力の中へ引きずり込んで溶かしてしまわにや
止まぬと言ひ事です。あまりの事で文句なんか出やせんです。ただ
ポカンとするだけです。

願力にまかせられた年の暮

まかせと言われて、そんならおまかせしますと言ひようなのでな
く、まかせとられたと一ツになつたのです。
なるがままとは「シカラシムルトコロ」と言ひころころ、まかせせ
られたとは「シカラシメタ」と言ひころころ。

—(昭和十二年十二月末日)—



あそがき

△故池山先生は東京御出身で、近角先生と共に三年獨乙に留學され、近角先生は世界の宗教事情を研究され、池山先生は勞働問題を考究なさつてお歸朝後は勞働運動を提唱し、現に「勞働組合」の譯語は先生の發案になると聞いています。其の後自己反省の機を得られて四十二才で入信なさつてからは第六高校、甲南高校、大谷大學教授として終生念佛裡に學生の信仰問題に著き師として御慈育下さいました。私も六高時代から先生の佛教化を蒙り御晩年まで慈顔徳育に浴し私の念佛生活の基盤となつて下されたことを深く謝し奉つて居る次第であります。昭和十三年十一月八日、文字通りに口に餘事を漚え給わず、念佛の息絶え終られました。

池山先生御在生の際、故近角常潤先生からの御吊詞にも「如何なる宿世の因縁にや、君と私と兄弟とも謂いつべき交りを結ぶこと丁度四十年、その間には國家宗教關係の問題につき意見を同じゅうし君が研鑽の結果をもたらして眞面目に眞一文字に馳せ参せられたこともあります。又三年の間共に洋行した日夜日本宗教界のことに心を研ぎて苦心慘澹した事もある。されど中心として君と私とを結びつけたものは歎異抄一冊である。君は頗る濃厚篤實の人にして誠に孝心深く、且又社會民衆に對して同情心に富み、理想と理實について煩悶懊惱した様である。至極何氣なく心

頭忽然として浮かび出た文句は親鸞におきては唯念佛して彌陀にたすけられまいらすべしという御文であつた。それを同時に口をついて自然に念佛の聲が溢れ出したとのことであつた。久方振りに君に遇うて其の心境をききたる時君は微笑みて私に答うるに、一向專修の人々において細心ということただ一度あるべし、という歎異抄の一句であつた。實に君が念佛行者として行住坐臥斷を絶たなかつたことと私共の遠く及ばぬ次第である。君が歎異抄を獨譯し、又これを意譯して普及せられたことは何人も承知のことである。ことに簡易生活に甘んじて名利に超然たる有様は涙ぐまじきことであつた。教信沙彌を募られたる親鸞聖人のおもかげはたしかに君が晩年の行儀に見ることが出来云々」と親情をふる御言葉がありました。

△山下先生の御原稿は定散自力心の微細に動いて一種名念佛すれども無明なおあり、志願の満てざる者への御懇切な御教示であります。再讀再思されて信心の溝を充分に深えられんことを企願する次第であります。

△堀山君は大谷光瑞師にお件して大連や京都の三夜莊に永く居られました。終戦と共に郷里に皈られて悠々の生活をして居られました。眞面目に而も微細に我心の動きを見つめられて美わしく念佛相續せられ、地方の青年や婦人の方々にも信友を見出されて居られます。御住所は、長野縣下高井郡穗穂村宇相尾區であります。

花田生記

昭和二十四年六月十日印刷 昭和二十四年六月十五日發行 毎月一回十五日發行	定價 一部金拾五圓（郵稅共） 一年分金百八拾圓 郵稅共）	編集兼 發行人 花田 あや	名古屋市昭和區幸樂町二ノ二十九番地	名古屋市千種區千種町馬走二八 印刷人 本 伍 郎	名古屋市千種區千種町馬走二八 印刷所 千草印刷所	名古屋市昭和區内幸樂町二ノ二九 花田正夫方	發行所 慈光社 振替口座番號 名古屋一〇四七〇番
--	------------------------------------	---------------------	-------------------	-----------------------------	-----------------------------	--------------------------	-----------------------------